

〔研究ノート〕

## 環太平洋地域は運命共同体である

### La Cuenca del Pacífico forma una comunidad con un destino común

木 村 光 伸

#### Resumen

El gran terremoto que azotó toda la costa del Pacífico de la región de Tohoku a las 2:16 de la tarde del 11 de marzo de 2011, creó colosales olas de maremoto “tsunami” y causó grandes daños humanos y patrimoniales a los vecinos del litoral. Es el Gran Terremoto de Japón Oriental. Este terremoto y tsunami dieron golpes directos a la central nuclear Fukushima Dai-ichi de la empresa Tokyo Electric Power Company (TEPCO) y arrasaron los reactores 1, 2, 3 y 4 de la planta de generadores nucleares. Sobre este desastre, las opiniones se dividen entre quienes creen que fue un desastre causado por la naturaleza y quienes creen que fue causado por el hombre. En cualquier caso, nos vimos en la necesidad de reflexionar a fondo sobre cómo debe ser nuestra manera de vivir.

La vida de la sociedad actual se fundamenta en el acrecentamiento a pasos agigantados del consumo de los recursos naturales y de la energía. Este principio ha sido una premisa lógica en la dinámica de la economía capitalista en la edad moderna. Sin embargo, esta premisa está basada en la ilusión de que los recursos naturales y la energía explotables existen ilimitadamente. Pese a que ya, en el año 1972, el mundo fue alertado acerca de “Los Límites del Crecimiento”, nosotros hemos venido celebrando alegre y dispendiosamente nuestro encuentro con la vida moderna explotando los recursos naturales hasta el borde de sus límites y absorbiendo la energía hasta grados abusivos, tal como se puede comprobarse en las cifras que señalan el aumento meteórico experimentado en el consumo de la electricidad.

Es indiscutible que el hombre no es más que una de las especies vivas que habitan nuestro planeta. Esto quiere decir precisamente que su vida depende de complejas relaciones simbióticas con otras especies. Para su subsistencia precisa de una abundante naturaleza biótica. Un ejemplo que nos indica los fundamentos de cómo debe conducirse la civilización humana nos lo brinda la vida de los indígenas en el bosque tropical amazónico, que conocen la naturaleza y han venido haciendo buen uso de ella. Algo semejante puede observarse en el estilo de vida propio de las etnias en Asia en relación con el medio ambiente.

En Japón, desde que empezó el cultivo del arroz, el pueblo ha vivido rodeado del medio ambiente rico en naturaleza y, al mismo tiempo, transformado por el uso del hombre. Los japoneses lo llamamos SATOYAMA considerándolo como un complejo resultado de la colaboración mutua entre la naturaleza y la cultura humana. En la EXPO 2005 Aichi y en la X Conferencia de las Partes del Convenio de Diversidad Biológica, presentamos esta manera de simbiosis, no como algo propio de Japón, sino como una propuesta nueva e importante del estilo de vida en la cultura humana del mundo.

Nosotros, conjuntamente con los investigadores, los educadores y los practicantes de varias actividades sociales en sólida colaboración, debemos desarrollar la construcción de relaciones enriquecedoras y sostenibles entre el hombre y el medio ambiente, dondequiera que aquél se encuentre. Como punto de partida necesitamos aprender muchas cosas de muchos indígenas y

habitantes de otros confines de la tierra que no se rigen por los patrones de la vida occidental y que han venido viviendo en armonía con la naturaleza.

En su día Gauguin presentó su obra maestra titulada “¿De dónde venimos? ¿Quiénes somos? ¿A dónde vamos?”. Nosotros también debemos hacernos la misma reflexión desde el punto de vista científica. “¿Qué tipo de ser somos?” Más allá de esa reflexión, está el destino del hombre capaz de coexistir en medio de su entorno global.

## はじめに

この小論は2013年9月20日にメキシコ合衆国コリマ大学経済学部Universidad de Colima, Mexicoにおいて開催された国際セミナー「第4回持続的開発に関する現在の視座〈環太平洋地域におけるエネルギー問題と気候変動〉」IV Seminario sobre Visiones Actuales del Desarrollo Sustentable “Energía y Cambio Climático en la Cuenca del Pacífico”でのスペイン語による講演をもとに展開したものである。コリマ大学はメキシコ太平洋岸に位置するコリマ州Estado de Colimaにある総合大学で、メキシコにおける経済学の中核的研究教育機関のひとつであると同時に日本研究のセンターを有する環太平洋研究拠点でもある。環太平洋という概念は、かつての地政学的地域概念を大きく超えるものとして、とりわけ中南米諸国で急速に意識されつつある。同時にそれは地域（cuenca en Español, area in English）という観念を大きく超えた、よりグローバルな視点を感じさせる用語として定着しつつあるといっていよう。コリマ大学はこの観点を重視したグローバルな気候変動と経済活動の諸問題を統一テーマとして連続セミナーを開催してきた。2013年度は台湾と日本の研究者を招聘しての開催であり、私はその中で“La Cuenca del Pacífico forma una comunidad con un destino común”という演題で報告を行った。私の専門領域である霊長類の生態研究や、地域生態論と私が呼称している総合的な人間研究という立場から考えると、あまりにも広大で手に余るテーマではあるが、当面する経済問題（景気問題といったほうがわかりやすい）に還元したり、短期的な人間行動による気候変動のみで右往左往したりするような信仰とも思える現状の自然認識過程からは少々距離を置いて、この問題を考えてみたいというのが、あえてこのテーマを掲げた理由である。それはここ数年、私が考えてきた人間発展における「自己家畜化論」再検討のプロセスとも関係する問題であるので、私なりには一貫性があり、また「中南米における環境と人間」という30年来の課題とも整合するテーマであったと思うのである。

コリマ大学での講演を予定してメキシコシティに到着した日から数日にわたって、メキシコのほぼ全土は巨大な二つの低気圧の影響を受けていた（図1）。ひとつはカリブ海に発生したハリケーンで、ユカタン半島から北部の工業都市モンテレイにかけて広範囲に大雨を降らせていた。もうひとつは太平洋側に発生した大型の熱帯性低気圧でこれは東進してメキシコ中南部沿岸を襲い、観光都市アカプルコでは国際空港が水没して数万人の旅客が取り残されていた。メキシコ独立記念日9月16日の直後からメキシコ合衆国政府は軍を動員して被害の復旧と被災者の救出に当たらせており、コリマ大学も休校措置をとっていたのである。同じころ、日本でも台風18号

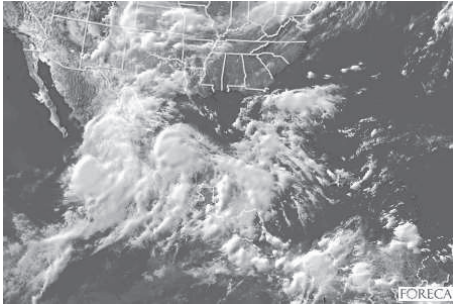


図1. 2013年9月17日のメキシコの天気（出典：Televisa）

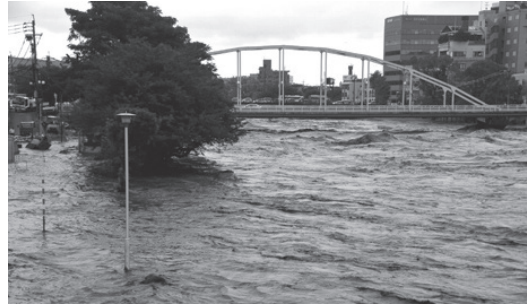


図2. 日本における河川の氾濫（出典：yomiuri online）

の襲来により、京都市内では桂川が増水して氾濫するという事態に陥っていた（図2）。京都生まれの私にとっても桂川の氾濫は記憶がなく、いわゆる大規模災害ではなかったものの、久々に台風の危機について意識させられることとなった。メキシコと日本において同時に発生した今回の自然災害の間に特段の因果的な関係があるわけではない。しかし、自然災害が太平洋沿岸部では、大型の低気圧の発達という気象現象としてかつて以上に意識されるようになった背景に漠然とした気候変動（異常気象としての温暖化）が想起されるのである。これは2014年から再び活発化すると予測されるEl Niño現象などとも関連して太平洋全体の問題として理解されなければならない大規模な気象現象なのであろう。そのような視点から見れば、日本や東アジアで起きているさまざまな気候・気象・環境に関わる出来事を、メキシコの人たちも対岸の火事では済まされないのである。その最たるものが3.11東日本大震災で発生した東京電力福島第一発電所1号機から4号機の巨事故である。

### 3.11から何を学ぶべきか

2011年3月11日午後2時16分に日本の東北地域の太平洋側全体を襲った大地震は、巨大な津波を発生させて沿岸部の住民に甚大な人的・経済的被害をもたらした。これが東日本大震災である。この地震と津波は、東京電力福島第一原子力発電所を直撃し、原子力発電プラントの1号機から4号機を壊滅的に破壊した（図3、図4）。この災害を自然災害と呼ぶか人災と呼ぶかは意見が分かれるところであるが、いずれにせよ、私たちは、私たち自身の生活のあり方を根本的に考え直す必要に迫られた。ところが、実際の行動は、といえば、これまでの「文化的」な生活の維持が大前提となるような変革（つまりは省エネルギーや環境対策を一段と産業化し、経済の仕組みの中へ導入するような方向）へと進むばかりである。

一方、この事故によって放出された放射性物質は大気の運動や海流によって太平洋側に拡散されつつある。図5はアメリカ海洋大気庁NOAAなどによるシミュレーションであるが、時間軸を長期にとれば、太平洋全域に影響を及ぼすような拡散モデルとなっている。たとえばメキシコ沿岸への到達時間およびその後の放射線量などは今後の状況の変化と連動するので、ここで量的な

指標を得ることは困難であるが、世界最大の海域である太平洋であっても、その影響を免れることが出来ないくらいの人的行為として今回の原発事故は理解されなければならないのである。それは同時に環太平洋地域を一つの問題共有の場としてとらえることの重要性を示唆している。



図3. 東日本大震災による津波（出典：陸上自衛隊）



図4. 東京電力福島第一原子力発電所の事故（出典：sizen kankyo com: asahi com）

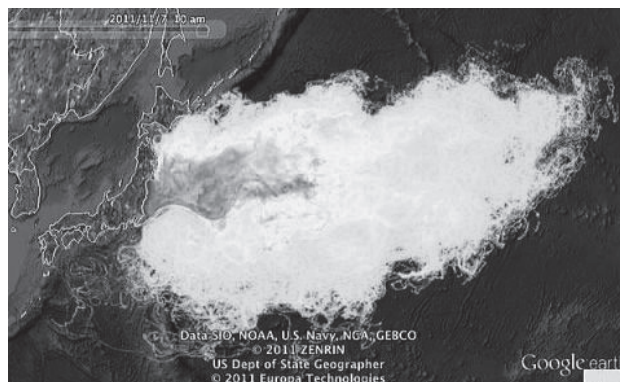


図5. 福島第一原発事故による海洋汚染予測（海洋汚染系）（出典：NOAA, US Navy and GEBCO）



図6. 1960年代の大気汚染（名古屋市）（稲垣隆司氏提供）

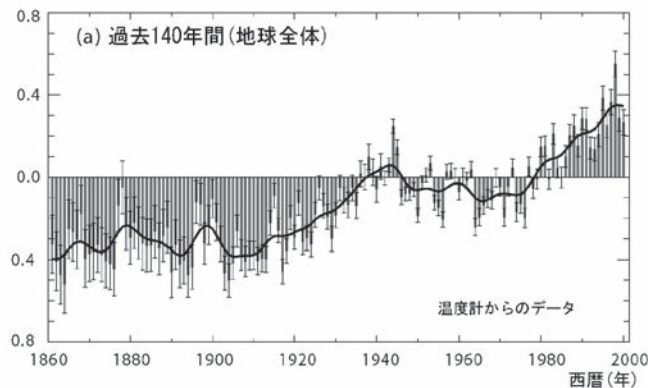


図7. 地球における大気温度の上昇（IPCC資料より改変）  
1961～1990年の平均からの気温の偏差（℃）

## エネルギー問題の論理と社会常識

現代人の生活は、資源とエネルギーの消費を飛躍的に増大させることで成り立っている。これは近代資本主義経済のあり方としては当然のことであった。しかし、この前提は地球上の利用可能な資源とエネルギーが無限に存在する、という幻想の上に成り立っている。すでに1972年の時点で、「成長の限界」は明確になっていたはずである。にもかかわらず、私たちは自然資源を限界ぎりぎりまで利用し尽くし、電力消費の爆発的な増大に見られるようなエネルギーの大量消費によって、文化的な生活を謳歌してきたのである。

3.11が突き付けた問題は災害問題であり、原子力利用の問題であり、それはまさに経済問題であるのだが、この問題の本質にある文明そのものにかたい考え方をもう少し精緻にしておかね



ば、「喉元過ぎれば」の繰り返しに陥ることだろう。

われわれはこれまでも文明の発展という図式を描くたびに地球環境に対する破壊圧力を増大してきたが、その解決策は何らとられることはなかった。もちろん公害対策としては技術的な進展があり、日本の中部圏においても1960年代後半から積極的に展開された工場排出ガス対策や光化学スモッグへの対応などによって大気汚染を大幅に緩和することに成功している（図6）。水質汚染や土壌汚染、廃棄物対策など、経済発展に起因する多くの問題が科学的(化学的)処理によって解決してきたわけである。しかしわれわれの利便性の追求がさらに次々と問題を生起させてきたことに変わりはない。それに対抗する経済発展論者は経済成長が環境問題解決の第一歩であると考えて行動してきた。3.11以降、懸案事項とされてきたいわゆる原発問題にあっても、現在の経済の仕組みを温存できるような対策こそが最上のもの（あるいは経済的混乱を避けることが至上の課題）であるという思考法は変化することがない。そのことは地球全体の環境を確実に悪化させており、これを地域的な解決課題という視点で理解するだけでは、環境問題へのアプローチとしてははなはだ脆弱であるといわねばなるまい。地球温暖化がCO<sub>2</sub>の人為的放出の結果の現象であるというIPCC第1作業部会（自然科学的根拠）報告（2013年に第5次報告が示されている）が正鵠を得たものはどうかはひとまず措くとしても、現象的な意味で気温の上昇傾向は否定できない（図7）。このような諸問題を経済発展や人間生活の利便性の追求に随伴する現象として容認するのかが議論の分かれ目となる。PM2.5に象徴される中国の大気汚染はもはや一国の問題ではなく東アジア全体の懸念事項となっている。それらもいずれは地球全体の問題へと拡大することすら予見されつつある。したがって個別地域の経済的、環境保全的課題はつねにより大きな地域にとっての深刻な問題となることが予想されるのである。

## 生活を問い直す

あらためて言うまでもなく人間は生物の一種に過ぎない。これは生物全体の中で他種との複雑な共生を通してしか、人間が生きられないことを意味している。人間の生存には、豊かな生物的自然の存在が不可欠なのである。たとえばアマゾン熱帯林における先住民インディヘナたちによる、自然を知り、有効に利用してきた生活は、人間の文化のあり方の根本を指示しているように思われるが、20世紀以降の非先住民による開拓は自然の循環的利用から自然の不可逆的破壊へと確実に変化してきている（図8）。それと同様のことは、アジア地域における民族固有の生活様式と自然環境との間の関係（図9）にも見て取れる。タイ北西部のモン族居住地域では20世紀末からの急激な開発圧力、とりわけ山間地への電気の敷設と道路の延長により、多くの集落で生活様式の根底的な変化が迫られている。私は1995年と2006年に現地調査を実施してその現況を把握してきた（図10）。この変化は住民の生活を便利にしはしたが、その一方で、本来の生活様式から生活の音や香り、あるいは温かみを奪っている。そのようなものは経済的な観点から見れば取るに足りないと考える現実主義もたしかに存在するであろう。しかし失われた歴史的・伝統的生活が戻ることは二度とないのである。これは利便性の追求という一面的な理解をもって済ま



図8. アマゾン熱帯林の開発と破壊の一事例（La Macarena, Colombia）



図9. 自然河川を利用した生活（Lhasa近郊のチベット人農業地域, Tibet）

せるわけにはいかない問題なのである。

日本では、稲作を始めたころから、人間の暮らしの周辺には、豊かであり、同時に人間の利用によって変化させられた自然環境が、困難な住民生活の結果として、存在してきた。日本ではこれをSATOYAMAと呼び、自然と人間文化の複雑な複合体であるとみなしてきた。そのような生活のありようは、単に過去の伝統であるといって済まされたり、より利便性の高い現代的生活手段によって簡単に置き換えられるべきものではない。そこで議論すべきは人間存在の価値の問題であり、自然の中に定住する人々にとっては生活の質の問題なのである。



図10. 近代化にともなう生活の急激な変化（タイ北西部、モン族の集落）。左が1995年、右が2006年。

ここで私が言いたいのは、人間の「文化なるもの」は地域の自然環境との間に交わされた相互交渉の集大成として存在しているということである。この問題にはすでに別の論文で触れているのでその一部を再掲しておく。

もちろんそこには他地域の人間との関係や歴史的なしがらみが大いに関係してくるだろうし、何よりも当事者自身がそのような関係を自覚しているわけではない。この自覚せざる環境との関係性こそが人間のたどった道における人間らしさの源泉となっている。それを自己家畜化という言葉で表現するのであろう。自己家畜化などという言葉を聞くと、何やら人間が自らを意図的に「飼いならして」きた歴史を指すような錯覚に陥る。しかしわれわれは自らを「飼いならした」のではない。あたかも自然の存在としての生物種がその生活の場との関係で結果として選択圧を受容してきたのと同様に、人間は自然環境との交わりの中で「飼いならされて」きたのであり、その後は「飼いならされ」続けることによって生じる次なる環境（それは徐々に人間臭い二次的環境と化す）による「飼いならされ」の過程が進行してきたのだといえる。そういう視点で見る限り、自己家畜化とは人工環境への人類の適応の結果であり、その過程で



図11. 日本の代表的自然植生（照葉樹林）と都市近郊の里山景観



働くのが自己人為淘汰の法則なのである。

自己人為淘汰という耳慣れない述語はいくつかの前提を包含している。ひとつは人為淘汰であるにもかかわらず、そこに自己の意志が存在しないということであろう。意志なき自己選択にはたしかに意図された方向性は存在しない。しかしそのような誘導が生じる動因はある。それが欲望という心的過程なのである。動物はあらゆる意味において欲求を持つ存在だ。人間もその分に漏れない。しかし根本的に違うのは欲求が充足を持って終わる過程であるのにたいして、欲望は終わらない。そういう意味で欲求は動物行動一般が持つある種の鍵刺激と行動そして終息という一連の生物的過程であるのに対して、欲望は次なる欲望を生み出す前提となる社会的な連鎖過程なのである。

自己人為淘汰のもうひとつの前提は「社会化された自然」とその象徴たる「食料などの自己生産システム」として理解されている。それらは人間の従属栄養生物としての生存と人口拡大による生物圏制覇戦略のための装置となったが、その方向性を定めることはなかった。すなわち自己人為淘汰には「実用的目的」も「進むべき方向性」も存在しない。そこにあるのは欲望の限りなき連鎖だけである。それにもかかわらず、人間がいま見るようにある種の繁栄を遂げてきたのは、まさに畢竟の妙だと思わねばなるまい。

(木村光伸, 人間らしさの生態学的基礎: 自己家畜化論の再検討のために,  
『3.11から総合人間学を考える』学文社, 2013)



図12. 人類史における文化と文明の変遷

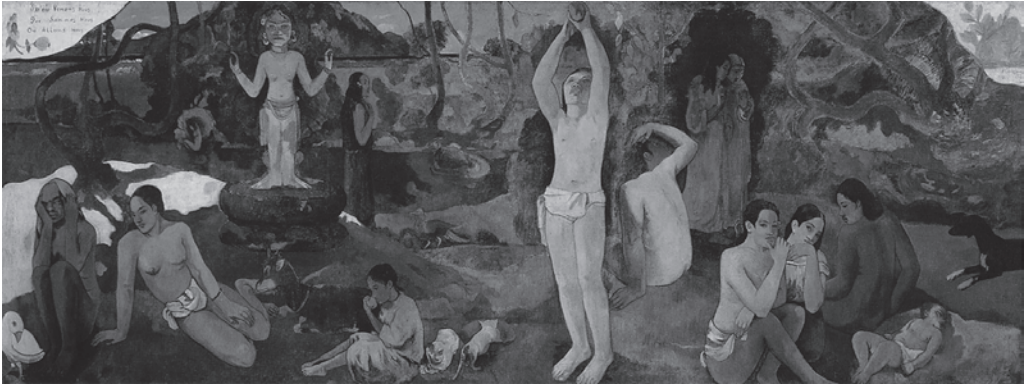


図13. Paul Gauguin: D'où venons-nous? Que sommes-nous? Où allons-nous? ボストン美術館所蔵。

ここで私が述べた「欲求が充足を持って終わる過程であるのにたいして、欲望は終わらない」という指摘は文明の本質の一つである。拡大しつつ再生産を繰り返すシステムとしての文化のあり方は「サルから人への歴史」を形成してきた原動力であったのかもしれないが、文明を無原則かつ無自覚・無方向に拡大させることで、有限世界としての地球との折り合いを根底から破壊するのである。それを自己家畜化あるいは自己人為淘汰過程と理解するのである。

21世紀は文明再構築の時代であり、拡散し文明を崩壊させる道としてではなく、自己を管理し地球という有限の空間と資源の中で多様な文化を尊重しつつ共生を図るような世界が、人類の共通目標として設定されなければならない。2005年の愛知万博（EXPO Aichi）や2010年の生物多様性条約第10回締約国会議（CBD, COP10 Aichi-Nagoya）では、このような共生のあり方を、日本独自のものとしてではなく、世界の人間文化における重要で新たな生活様式の提案として紹介したのである。

### われわれはどこへ行くのか

われわれは研究者や教育者、さらにはさまざまな社会活動の実践者と一体になって、世界のどこにおいても、人間と自然環境の、豊かで持続的な関係づくりを進めていかなければならない。その前提として、われわれは、自然とともに生きてきた多くの先住民や非西欧的な暮らしを持続している人々から、たくさんのことを学ぶ必要がある。

かつてゴーギャンは、「われわれはどこから来たのか、われわれは何者なのか、われわれはどこへ行くのか」という大作を発表した。私たちも、「われわれはいかなる存在なのか」ということを科学的に再考していなければならない。その先にこそ、グローバル社会で共存可能な人類の未来があるのだ。